

江島恵教教授の急逝を悼む

高崎直道

去る5月22日の夕方であったか、東大の印哲研究室から電話があり、その日の正午過ぎに江島教授が亡くなったと報らされて、私は「どうして」と言ったまま絶句した。私自身は体調をくずしていたため欠席したが、その前々日の木曜日夕方に、日本印度学仏教学会の理事長として推進していた大正新修大蔵経のデータベース化に関する運営委員会があり、晩くまで元気に将来の構想について論じていたとも聞いたからである。誰もが信じられないくらいの突然の死であった。前夜金曜の夜も仕事の打合わせがあり、ひとりが西武池袋線の途中まで同道して別れたが、そのあと教授は自宅のある清瀬の駅で倒れていたところを救急車で病院に運ばれ、手当の甲斐もなく翌日こと切れたとのことである。私たちの仲間で誰もその場の目撃者はおらず、詳細は詳らかでない。奥様はじめ御家族にとっては、正に青天の霹靂であったことであろう。謹んでお悔やみ申し上げる次第である。

江島教授は仏教思想研究者、インド文献学者として、若年以来、そのすぐれた頭脳ぶりを私共に示されたが、教育者としても、その全身を打込んで指導されることで、学生たちに敬愛されていたことは羨ましくなるほどであった。ドイツのゲッチンゲン大学に留学して、サンスクリット写本の解説に習熟され、その知識を指導する学生たちに授けて研究室に新風をふきこみ、その成果がいま漸く実ろうとする矢先であった。来年3月の定年を前にする急逝はまことに痛恨の極みである。

江島教授はさらに、学会理事長としての職務をはじめとし、数多くの組織のまとめ役としても、その実力を発揮した。これはひとえに教授の円満な人格と、控え目ながら絶えず周囲に気配りをしながら事をすすめる態度に、ひとが自ら敬服したからであろう。いまここに追悼の文を書いている「古典の再構築」という研究組織の成立に関しても、教授の貢献は絶大であったことは、研究代表者中谷教授がしみじみと述懐されたところであった。中谷教授によれば、平成8年秋、京都側の構想をもって江島教授に会って相談したとこ

ろ、直ちに両手を挙げて賛同され、たちどころに東京側の、インド学はもちろん諸領域の古典学 西洋古典、中国、日本、イスラム学、オリエント学 の研究者たちによびかけて、組織づくりに努めて下さったとのことである。この共同研究の副題に含まれた「文化横断的研究」というキーワードも、江島教授の発想に基づいている由。教授の人柄に魅せられて、ひとびとは協力を惜しまなかったものと思われる。教授自身が、まさに文化横断的に広い視野をもち、的確に判断を下す智の人であった。人々に対する暖い心と、すぐれた智力を備えているということは、仏教が、智慧と慈悲の二本足として理想とするところであり、その献身的な利他的な実践は正に菩薩行であったと言ってよい。

その気配りと強い責任感による学界への献身は、しかしながら、江島教授の命をちぢめる結果となった。教授は人も知る酒豪であったが、いくら飲んで、その素振りも見せないところ、知らない人は誰も、その白皙の顔から酒豪とは見えなかったようである。仕事を終えて、手伝ってくれた学生たちを慰労しても、教授自身はひそかに次の仕事のことを構想していたのではないか。疲れを酒でまぎらしたことが、体をこわして、この度の急逝につながったのではないか。この春先であったか、少し体調をくずしたようなことを聞いていたのに、忠告もしなかったことも悔やまれる。(因みに訃報にあった「特発性食道破裂」というのは、私が医者に聞いたところでは、強い酒の常用で肝硬変をおこし、静脈溜が食道内に出来て、その破裂により血流がふき出た症状を言うとのことである。)

「古典の再構築」も今年二年目に入って、多くの個別的研究の応募、採用を得て、総勢137名におよぶ研究者によって、これから本格的な研究を進めようとするところであった。私共としては、江島教授の献身的貢献を無にすることなく、着実な研究成果をあげて、その功労に報いることを教授の霊前に誓わなければならないまい。

最後になったが、重ねて教授の御冥福をお祈り申し上げます。 合掌

(「古典学の再構築」総括班評価委員)

故江島恵教氏の略歴及び研究業績

東京大学大学院人文社会系研究科

丸井 浩

江島氏は1939(昭14)年8月28日佐賀県に生まれた。1966(昭41)年3月東京大学大学院人文科学研究科専門課程博士課程を終え、同年4月東京大学東洋文化研究所助手に採用された。その後フンボルト財団奨励研究員としてゲッティンゲン大学Becher教授の下で2年間の在外研修をなし、1975(昭50)年3月東京大学より文学博士の学位を取得した(“Bhāvavivekaを中心とした中観思想の研究 空性論証の論理をめぐって”)。

長岡技術科学大学工学部助教授を経て、1982(昭57)年4月東京大学文学部助教授に就任、1987(昭62)4月には同教授に昇任し、逝去するまでの20余年の間、主としてインド大乘仏教の分野における第一線の研究者および教育者として活躍した。また学外における活動も精力的であり、諸学会の評議員・理事等を歴任、1996(平8)年9月には日本印度学仏教学会理事長に就任した。

江島氏の専門分野はインド大乘仏教中観思想であり、世界的にも屈指のパーヴィヴェーカ(Bhāviveka, Bhāvaviveka)研究者であった。氏は主著『中観思想の展開』(春秋社 1980)において、(1)パーヴィヴェーカの代表作『中観心論頌』第3章「真実知の探究」のサンスクリット本文(およびチベット語訳)のテキスト校訂・翻訳を行い、(2)日常論理を超えた空性なる真実に悟入する手だてとして、むしろ日常論理が果たす積極的な役割を見出し、かつそのような究極真理を指向する論理の定式化をめざすパーヴィヴェーカの思想的立場を明確にし、また、(3)多数のチベット語訳文献やパラモン哲学文献の解読をも踏まえて、パーヴィヴェーカを軸とする中観思想の展開を明らかにした。本書は、従来未開拓だった多くの資料を提示・分析し、インド大乘仏教思想史の空白部分に大きな光を当てた点で重要な意味を持つばかりでなく、氏の文献研究・思想(史)研究に対する方法論的自覚が明確に打ち出され、そこに脈打つ程よく自己抑制的な批判精神は、後続する中観思想研究者にある確かな指針を提供したと言える。

さらに本書公刊以後も、氏は中観思想史研究に多くの成果を上げているが、若干の論文を列挙するととどめる。

「中観派における対論の意義 特にチャンドラキールティの場合」(『仏教思想史3<インド内部における対論』平楽寺書店、1980. 12, pp. 147-178)
「アティーシャの二真理説」(壬生台舜編『龍樹教学の研究』、大蔵出版、1983. 2, pp. 359-391)
「Bhāvaviveka / Bhavya / Bhāviveka」(『印度学仏教学研究』38. 2, 1990. 3, pp. 98-106)
「Bhāvivekaの言語観 瑜伽行学説批判との関連において」(『成田山仏教研究所紀要』15, 特別号『仏教文化史論集2』、1992. 3, pp. 75-93)

このように江島氏は中観思想を専門としていたが、アビダルマ研究においても顕著な業績を残している。すなわち、ヴァスバンドゥ(世親)著『俱舍論』第1章「界品」のサンスクリット・テキスト校訂である。

Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu, Chapter 1: Dhātunirdeśa (ed.), Bibliotheca Indologica et Buddhologica 1, Tokyo, the Sankibo Press, 1989. 9.

さらに江島氏は、大乘経典研究に便宜を供与すべく、プロジェクト・チームを組織し、『法華経』のサンスクリット原典・チベット語訳・漢訳対照総索引のうち、サンスクリット語見出し語およびチベット語見出し語の索引はすでに公刊されている。

漢訳(羅什訳)見出し語のものも近く完成を見るはずである。

Index to the Saddharmapuṇḍarīkasūtra Sanskrit, Tibetan, Chinese (Chief editor), fascicles I - XI, Tokyo, the Reiyukai, 1985 - 4 - 1993.10.

Tibetan-Sanskrit Word Index to the Saddharmapuṇḍarīkasūtra, Tokyo, the Reiyukai, 1998.12.

最後に、逝去されるまでの数年間、江島氏が最大の精力を注いだプロジェクトが、『大正新脩大蔵経』全85巻のテキストデータベース化である。氏は、いわば一研究者個人の枠を捨て去って、全世界の仏教研究の発展に資すべく、文字通りこの大事業に身を投じた。技術上、組織上、経済上の諸問題を氏は不屈の精神で乗り越え、今や内外の協力、支援体制も整いつつあり、すでにデータベースの一部完成、インターネット公開という段階にまで至った。その完成を見ずに氏が急逝されたことは、まさに遺憾の極みである。

この『古典学の再構築』の立ち上げ、推進にあたって、江島氏が果たした功績は甚大である。氏は幅広い学識、深い洞察に加えて希有のバランス感覚をそなえた得難い人材であった。

江島氏から賜った数々の恩誼に、深謝の意をここに表します。

(「古典学の再構築」総括班員)